



同志社人物誌(30)

富森幽香
とみの もり ゆ か

中嶋静恵

「舎監」以前

幽香は近江国、水口藩医師、巖谷修の二女として一八六五年一月十五日、水口村に生まれた。父修は後、書道家として有名になり、一六と号し、官職にも就いたので幽香の幼年期に東京に居を移した。一六は三人の妻を持つたが、はじめの妻との間に生まれた長男・

立太郎は、のち留学して、日本最初の工学博士組の一人となり、次男・弁二郎は、一六と並んで有名な書道家日下部鳴鶴の養子となり長女・かねは竹中家に嫁いだ(竹中勝男の母となる)。そして二番目の妻との間に生まれたのが季雄と幽香で、季雄はのち創作童話の草分けとなった巖谷小波である。この二人の母は草津の人で大変美人であったという。

幽香は、一八七二年に文部省設置の東京女学校に入学、五カ年修業の後、跡見女学校に一年間修学する。知育徳育に加えるに情操教育に特長のあったこの学校は、良妻賢母養成校として知られ、生徒には華族や貴族が多かったという。幽香がどういう娘となって成長して行ったかはこまでおおよそ見当がつく。一八七九年、幽香は十六才で故郷に帰り、関西鉄道会社常務の西村篤と結婚し、富森姓となった(富森家はその先祖助左衛門が四十七士の一人として討入り、切腹後、断絶していたのを親戚にあたる両家が寄って再興したことになる)。一八九六年までに幽香は、長太郎、せの、京次、皆三、とし子の三男二女を生み、それらのこどもの手が離れるまでは外面的には少くともごく平凡な良妻賢母の道歩んでいたもののように見える。しかし、これはあくまで想像ではあるが、内面的には平凡でなかったと思われるのは、八七年以後に幽香が京都、平安教会で牧師松山高吉から洗礼を受けている事実による。その月日や動機は明らかでないが、宣教師によって八九年七月に水口講義所が開所されていることとあわせ考えると、幽香は第三子京次の幼児時代

から相当しつかりしたキリスト教信仰をいだき、聖書についてもよく勉強したにちがいないと思われる（後年、伝道師をするに至った基礎はこの辺で築かれたものと見るべきではないか）。

一九〇一年、幽香一家はハワイに渡った。

以前から病氣勝ちであった篤は、常春の国ハワイに行けば健康も回復すると思っただけであらうか。ハワイの一九〇一年といえば、その前年アメリカ領となり、契約労働から解放され、自由人となった日本人労働者が自覚を持ちはじめ、日本人会を設立し、耕地内に教会や寺院などを建てはじめたという年であった。静養中の篤に代わって幽香はここで初めて外出して働きはじめる。日本人美以教会（牧師・本川源之助）婦人伝道師兼婦人ホームの監督としてである。しかし長くは続けられなかった。篤の病状が期待に反して悪化して来たからで、二年後には帰日、翌一九〇四年五月十七日に篤は幽香と子どもたちに先立って逝ってしまった。十月になると水口伝道所の牧師山田兵助（大津教会兼牧）は幽香を同伝道所の婦人伝道師に誘い、それを承諾させた。

水口伝道所でその翌年、伊藤藤義牧師から

受洗された秦孝治郎氏によれば、その時代は青年の集うもの多く、岡山孤児院のため今というチャリティコンサートを開催するなど、教勢も盛んな時代であったが、それは実に婦人伝道師幽香の人がらにかかっていたのである、英語ができ、新知識も豊かな当時の幽香は、まさに文化を代表する先達であったという。

「舎監」時代

一九〇六年から七年にかけて同志社女学校ではちよつとした事件の展開があった。校長丹羽が示した女学校施政方針の中に「舎監に必要な一資格は齊家と慈母との経験あること……」とあったことから独身の平安寮舎監がまず辞職、ついで他の女教師も袂を連ねて辞職を申し出たのである。そこで校長は家政科の茶道講師・三木真砂を無理に平安寮舎監に、会計・佐藤満寿子を副舎監に頼み、それまで普通、文科、家政の三寮に別れていた寮生を上級生は下級生を指導するのがよいという理由で混入雑居させ、食堂は外部に請け負わせるといふ処置をとったのである。

そこに登場してくるのが富森幽香である。

推薦者は牧野虎次（義士討入り前に助右衛門の長男を託された管家の出身）である。

幽香四十二才。当時長男はホテル業を志してロサンゼルスに留学中、長女はすでに嫁ぎ（藤沢ラン子はその娘）、次男・京次は神学校に在学中、三男・皆三は東亜同文書院へ留学決定の時間待ち（四月から同志社普通学校物理教師の助手となる）、腰ぎんちゃくとなって母について来たのは、やがて小学校五年になる二女とし子だけで、前年から改正採用になった女学校規則第一条「本校は……齊家処世の才能、婦徳を涵養するを目的とす」の目的達成のためには最適者として現われたのである。一八〇七年三月十一日「衆望を負うて」同志社女学校平安寮舎監に就任、その初月俸は三十円であった。

未亡人を象徴する切り髪、富森家紋「劔かたばみ」を背につけた黒い被布、その小柄の美人が放つふしぎなまでに冒すべからざる品位。幽香のこのイメージは実行力として就任早々にあらわれる。

幽香は早速舎監の他に修身科授業を命ぜられるが、これはむしろ幽香の望むところであり、望まぬことというより我慢ならぬことが

一つあった。それは請負制度になった食事と
幽香の記によれば、「今出川通は今のやうに
電車もなく朝は朦々と煙のやうな埃を揚げて
つ引ききりなしに下肥車が通るので名づけて
朝クサ通と申して居りましたが、其アサカサ
通りを薄い布一枚かけた私共の御馳走が人の
肩にゆられゆられ黄金車の間を縫ふて来るか
と思ふと余りよい気持は致しませんでした」
とある。そこで幽香は田井という賄主任を雇
い、水口から教会員の細木なつをも手伝いに
呼びよせ、食事を寮自営にもどした。実施し
たのが五月一日である。六月には東京の日本
女子大学の寮を視察のため出張している。次
にもう一つ幽香に我慢ならぬことが起つた。
それは寮が古い校舎の二階にあるせいか、暖
かくなるにつれて蚤の跳梁が激しく、つし
み深い幽香は安眠ができないことであつた。
あれこれの疲労も重なりやがて幽香は神経衰
弱になる。夏休みまで待つて幽香は、とし子
を同道して茅ヶ崎に養生に行った。(弟・小
波の日記によれば南湖院に入院したことにな
っている)

十月にはいつて平安寮に帰任。帰任を待ち

構えていたのは今度は同志社教会であつた。
幽香は早速教会役員と婦人会組織委員にあげ
られ、翌年からは日曜学校(女学生対象)教
師をも命ぜられる。創立の歴史からして同志
社教会は同志社全学園の宗教教育になうと
ころであり、したがつて幽香のこうした立場
は、それ以後、学園の宗教教育を支える一本
の柱として重要な位置を占めることになる。
一九〇九年十二月にはジェームス母子の寄
付によつて待望の新平安寮が落成した(現在
の黎明館の位置)。大広間も事務室もある。
二間つづきの舎監室もある。娘と二人、やっ
と安心して眠れるようになったと思つたのも
つかの間、幽香の健康は再び損いはじめた。
まだまだ少女に過ぎない女学生に信仰をすす
めることは、水口伝道所に道を求めて来た青
年に道を説くことと同じわけにはいかない。
それどころか、なまいきにも反抗してくる寮
生もある。その辛さと焦りもあつたし、さき
に健康を害して三重県津に出養生させてある
三男・皆三のことも気がかりであつたし、さ
すがの幽香も時には、気を許した寮生の手を
取つて、心の中を打ち明けたり、涙を流したり
したことがあつたという。一九一二年が明け

るとすぐ幽香は三カ月の欠勤届を出し、後事
を松田道やデントンに頼み再び茅ヶ崎に行つ
てしまふ。そして帰任したのは五月であつた。

★

平安寮では、太平洋戦争の混乱期まで、日
曜日を除く毎朝、自室での「お静かの時間」
―静かに聖書を読み瞑想する―、毎夕広
間での「夕礼拝」、日曜日朝ごとの「日曜学
校行き」金曜日夕ごとの「祈禱会行き」がほ
ぼ完全に守られて来た。これは平安寮に起居
したものとっては、それがいかに形式的習
慣的なものであつたとはいへ、それぞれのそ
の後の生き方の一つの指針となつてゐること
を多くの報告で知ることができる。また当時
の寮生たちが、これも習慣的にはあるが矯
風会青年部に属し、広間に集まつて自らの足
袋^びつぎをして、その自らの努力に対するいく
ばくかの金銭を矯風会事業のために捧げてい
たことは、ささやかな労働を通して奉仕のよ
ろこびを初歩的に感得させたことであろう。
(その頃の青年部長として活躍した竹中(杉
田)光子の兄のところに、後、とし子が嫁ぐ
こととなる。)また毎学期末に、下女・男を加
えて広間でサヨナラ会を催していたことは当

時の寮生に一つのキリスト教のあり方を示したことであろう。

このあたりで幽香の舎監生活の中間期一九一八年から一九九年のあたりに目を向けてみよう。

大正七年十二月十五日同志社女学校普通学部寄宿舎報として生徒監兼舎監富森幽香が本部に提出したものの前半を紹介する。

「本年度新入舎生二十九人、退舎生三人、現在寮生六八人、舎生中キリスト教信者三六人、本年度舎生衛生状態。流行性感冒五六人、脚気二人、肺炎二人、盲腸炎一人、肺炎カタル一人。

寮舎改善に就ての希望。一、寮舎の増築
二、病舎及それに附随する便所の新設
三、電話の新設
四、便所の改革」

幽香にとってはカチューシャの歌が流行しようとして、その松井須磨子が自殺しようとしたことではない。米価が上つて米騒動が起るうと（一九一二年食費一カ月六円。一九一九年、十二円。翌年、十五円）まずまず心配しなくともいい。そんなことよりも寮生の病氣の方が重大事である。一九一九年十月頃から翌年にかけて世界的に流行したスペイン風邪

にはかからぬ方が珍らしいくらいで、虚弱な幽香がその時をどんなに苦しみ、祈り、身心を勞し寮の設備の不十分を嘆いたかは想像に余りがある。

幽香は学校で聖書、修身、作法を教え、祝日礼拝では聖書朗読、祈禱を受け持ち、寮では夕拝を司り、食事ごとに松田道と交代で感謝の祈りを捧げる等、それらは喜んで引き受けたが、公の席で説教をするとか、感想文を何かに載せるということはなかった。であるから、ある卒業生は幽香のことを、平安寮の縁の下に咲いた一輪のバイオレットと評している。

一九二七年をピークとする学園の宗教運動は老境に入ろうとする幽香には何よりの生き喜びであった。その前、二三年の金森伝道では平安寮から十八名の受洗者があり、二七年の堀伝道では一挙に四十一名の受洗者があった。その前後にも賀川伝道が相当の受洗者を出している。社会問題まではまだ眼の開かれない女学生の寮は、当時、ただもう聖火に燃えていたといつていい。

この感激の中で、幽香は六十五才になり退職することになる。一九三〇年八月三十一日

付。在職期間足かけ二十五年である。

幽香を評すのに、ある卒業生は、情に弱れずあくまで理智的であり、厳格に過ぎたとい、ある卒業生は厳格な中にも愛情があったとい、ある卒業生は着物の脱ぎ着まで教えてもらったわとい、ある卒業生はこわいオバアだったわ、という。どれも真実であらう。幽香自身は二十五年といえは四半世紀であると言ひ、そのあとに「就任当時女の姿をして居りました私が自分の知らぬ間に爺やに化けて居るのも無理は無かろうと皆さんに笑はれて居るような始末で御座ります。只変らぬものは太陽が東に出て西に入り万物を育てはぐむ天地の運行と、そして之を主宰し給ふ神の限りなき慈愛で御座ります」と書いています。ちよっぴりユーモアもあるが、やはり神中心になつてくる。これが幽香である。

「舎監」以後

退任すると幽香はまず京都に在る次男・京次（当時神学部長）の家に身を寄せ、大太平洋戦争がはじまると小田原の長男・長太郎のところに移り、一九四三年には秦孝治郎氏宅に迎られた。秦氏は幽香を青年時代からの信仰

師であるとして、物の不自由な戦争末期にこそその恩に報いるべき時と、はじめ横浜の自宅に、つづいて鎌倉の別荘に幽香を豊かに住まわせたのである。その上、八十に手のとどく幽香から謙虚に聖書の手ほどきを受けたという。敗戦の前に杉田家から申し出があり、今度は幽香は向日町の娘の許で最後の時を過ごすことになるが、秦氏はその後も幽香のためにといつて、いくばくかの費用を杉用家に送りつづけた。

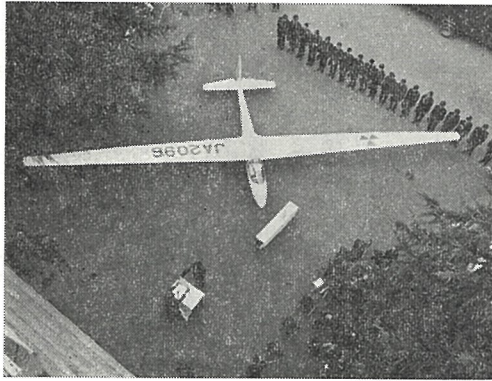
一九四九年一月十一日、幽香は狭心症のため永眠するが、最後まで一人で厠にも行き、誰の厄介にもならなかったという。死を前にして、集まって来た者に書を書いて与えたともしう。満八十四才。神学館チャペルで告別式が行われた。その墓は泉岳寺四十七士の墓所の奥にある。夫・篤、長男・長太郎、長女・せの、三男・皆三らとともに、さすがに俗名のまま少しづつ離れて建てられてある。

(二男・京次の墓のみは相国寺長得院にある)
先年、末女のとし子も逝き、今はその墓を訪れる肉親の子はひとりもない。

(昭2女普卒・本部囁託)

アイオーン号命名式

大学体育会航空部は、昨年、新型グライダー、ソアラークa6E型を西ドイツから購入、その命名式が十二月七日に明徳館前で行なわれた。



同機は長さ六・七メートル、幅十五メートル。アイボリーの機体に紺色で校章がくっきり入ったスマートなもの。来賓や航空部員ら約四十名が見守るなかで、住谷総長から「アイオーン号」(ギリシャ語で永久という意味)と命名された。

大学航空部にはこれまで複座機「イオラス」があり、約三十名の部員は同機を使って練習をしていたが、記録用としてはむかないので、昭和四十年以来、部長の小野哲法学部教授を中心に、記録用として設計されたグライダーを買う計画をすすめてきた。しかし、一機二百八十万円もするので同部の年間予算ではとても買えず、部員のアルバイトにより三年がかりで購入費の約半分を作った。この話を聞いて、約百二十名のOBが十万円、大学からも百万円の援助があり、ようやく部員たちの努力が実ったもの。

アイオーン号の活躍については、小野部長が本号に随想を寄せているので、それをお読みいただきたい。